

© The Tiffen Company, 2000

KODAK Gray Scale

C

Y

M

Kodak
LICENSED PRODUCT



白隱
禪師

夜船閑話

全

ヤ 9

892



門 892 本

明治十九年十二月刻成

白隱 禪師

夜船閑話

京都書林 貝葉書院

夜船閑話

夜船閑話序 嶋田

藏書

窮乏菴主 饑凍選

嶋田 謹識 明治十九年十二月

蜜曆丁丑の春長安の書肆松月堂の末どりや
閑下遠く草書に裁して吾が鶴林近侍の
左右不寄せそとく依して兼侍老師乃古紙
堆中夜船閑話とらや云はば草稿あり書中
多く氣分鍊つて移らるる人の管衛として
充くしめり長生久視の秘訣に聚む

夜船閑話序

調ゆは神化鍊丹の至要ありと是故に吞の
好交の君子を乞ふおのれも交荒旱の雲霞れ
ぬ一偶く雲水の徒侶竊かに傳写し來は
あるも秘重し秘藏して人おしてんせおめは
天瓢むふしく櫃におさめて匿ししるが如く
預くは是は様に壽ぐふしていてま獨に感
せん固く老師常ふ人を利するが故に老後
を樂しみぬふと若交人に利あはる師豈

に是を吞しみぬふんと二虎會み來て師は豈
を師微くして笑ふせふおそ緒子舊書櫃
は固く草稿蠹魚の腹中に藏らる者仲糸
小さく緒子仰ら訂正傳写して既に入十來
紙は見は仰ら封裏していて京師に寄せん
と以て馬齒一日も法子不長と為ぬはくま
端中は書せん交交責む予も亦辭せしめて
去は云く師鶴林に住まる事大凡四十年鉢

囊衣掛けしより以来雲水多玄の布衲子幾
 う小門圃に跨ると師の毒涎と耳かひ痛棒は
 滋しと志を辞し去る復と忘る者或は十年或は
 二十年枯林への塵と心事も亦終に顧みざら
 底ありと盡く是義最林の頭角四方の精英あり
 名く西東五六里のる小分とく舊舎癯完
 老院破廟借てひく菴居のまことして清苦と
 朝艱苦辛盡餘夜凍は小投とる者も菜葉

麦敷耳に觸る者熱喝垢罵骨に徹とる
 者には咳奉痛棒見ると者頼と攢め同者肌
 汗と鬼神もはと涙と浮ははるく癩外も
 肉と掌は合せ川べりて初め有る時へ本玉
 河晏が義白みそて肌膚光澤凝とる膏乃
 めくろる者も久しうて恰も杜甫賈嶋
 の形容枯朽顔色憔悴とるがめく或は屋下に
 澤畔小逢ふらぬ一参玄軀余の顔とる底

の勇猛の上士にあらざるもの樂しむ
 者七斤時も濟泊する復と得んや是故に
 付くに参窮度のことと清苦節と失する族
 の肺金やみかしく水干枯渴して疝癖塊
 痛難治の重症を發せんとは是れ憐み足
 と愁く師の縁の色ある者連日乍ち忍後
 不禁にして雲頭を按下して彼の奥乳を
 絞つて是に授ふる内觀の秘訣を以て乃ひ

しく若是參禪辨道の工士心火逆上し身心勞
 疲し五内稠和せざる事あらんに鍼灸藥乃
 之はないて是れ治せんとかせむ經ひ義陀扁
 倉とまるとも輕く救ひ得る事能はし。而し
 他人還丹の秘訣あり休る輩々穢小是れ
 修せよ奇功を見り復雲霧を披ひて皎日
 見らるる人若し世秘要を修せんと欲せば
 且しく工を抛下し結頭を拈放し先

須くく熟睡一覺を去りて未だ睡らずして
 くと眼と心を合せざるは茶に向く長く支脚を
 展べ強く縮むを後一身の元氣とて一て
 氣海丹田腰脚足心の不足を補ふに
 此觀を本に當りて此の氣海丹田腰脚足
 心總に是れ我が本来の面目とて何の鼻孔あり
 亦此の氣海丹田總に是れ我が本分の家郷
 くと何の消息あり亦我が世の氣海丹田總に

是れ我が唯心の深土とて何の莊嚴あり亦我が世の
 氣海丹田總に是れ我が己身の弥陀とて何の
 法なる親くとお返へしと常に於くの如く
 妄想を去りて妄想の因果つらとて一身の元氣
 つらとて腰脚足心の不足を補ふに七臓下
 於くとて度い中とて條ありとて氣の如く
 恣意に草くに妄想しおち去て入り七日乃至
 二二七日の如くして心に從ふのみ狭く

老劣役劣の諸症底を拂て平癒せどんば
 せ偽が顔と切りねらまよと世において徳子教存
 能礼して寂々に精修と名く悉く念思縁
 の奇功と見る功の遅速は進修は精廉に依り
 とくども大は皆全快に名く内親の奇功と
 續嘆志て休まじ師の曰く休る輩を病全快
 とめて心く定まりととる友かると轉、治
 せは轉く参ぜよ轉く悟くば轉く進め老劣

初め参学の時難治の重病を發して是憂
 苦諸子小十倍せり進退難谷はる存るを不ひ
 そふ思惟とくくせりて此憂愁に沈ちん
 よりいぬくト予く死して世草囊を捨んよ
 と何の業をも此の内親の秘訣を法とんく
 全快を得る輩今人の諸子乃如く至人のま
 此は是神仏長生不死の神徳あり申下は世
 未あこ百歳ありぬしそ餘は針と定むる

らび予則ち歎喜小徳へと精修志くする者
大凡十年心身以骨に健康小氣力以骨小勇
壯さる変と覺ふ此において市祿を乞ふ竊
く不謂くらく縦ひ世志を終ふ修し得て彭祖
が八百の歳時を保ち得るも唯是一箇福を
無智の守屍鬼をくくのと老狸の舊巢小
睡るがゆい終小壞滅に歸せん何故今既
に獨りも葛洪撰張義其費張る輩ら公

見ば如くくは弘の大誓を憤起し菩薩の
威儀を學びひるふ大法施をばりしと先
つて死すべし虚を後にして生をさる底の不
退堅固の直法身にお殺し金剛不壞乃
大仙身を成就せんよと世においてま正參
まの上士あまの軍公はく内親と參禪と共
に命を並べば貯へて具の耕へし具の戦へん
蓋し茲に二十年年々一負を添へ二肩

と増し得く今既に二百衆に迫りしを中
 方来の衲子芳居疲倦の族々或は心火逆
 上し正に發怒せんとする底を憐み宥らに
 此内親の至要を傳授し之所に快癒せし
 め轉々悟道は轉々進歩しむ馬年と案古稀
 に就へりといふと又も半路の病患をく齒
 牙全く揺落せむ眼耳次牙に分別し
 初もこれに發覺せむ忘る毎月あ彦乃法施

終に怠倦せむ終に佗方に應じて二百入百乃
 海家と聚會して或は入旬七旬と終不録に
 雲水の不望ふ終く胡統乱乃とるまふ大元
 又六十會に及ぶといふと終に一日も罷編
 斎分損とる身は健康を力に次弟ふ二三
 十歳の時とて遙かに勝るなり是皆彼の内
 親の奇功に依る末に覺ふ任菴の諸子各
 く悲泣化終してとく吾が師大慈大悲願

くは内親の大恩を以て書きて謝りて候
末禪病疲倦を以て軍のゆき者を救へ師弟ら
領とて之を以て系統なる中依の親く書きて
曰く大九生を以て長末を以て保川の要形を
練るに志るに形を練るの要神氣なりと
丹田氣海のる不凝らとて一方にあり神凝る
則ち氣聚るとして則ち昇ら直丹なる丹集る
則ち氣固く神全と則ち神全と則ち

素く一是他人九轉還丹の秘訣に契一は須
らくあるを以て丹の果して外相不凝らとて
と子萬唯心火を降下し氣海丹田乃るよ
充くしむる不有るはくこのは任菴の緒子此
心要を勤めくを以て進んで愈くるとんは禪
病を治し勞疲を救ふのよにあはは禪門向
上の度にて年来疑團わむんてはたひふ
よを拍して大契とる底の大教喜者くむ

何が故そ月をうして珠教書く

惟時密曆 丁丑孟正廿八日

窮乏菴主 飢凍煙香 禱者首是

夜船閑話

山跡初め夫學の日誓川て勇極の信心を
 憤發し不退の道情心激起し精錬刻苦
 と信者既小あまの事乍ら一夜忽然とて
 落第と徒然多女の疑惑根より和らぐ氷
 融し曠劫生死の業根底不徹して區滅と
 自覚し道ち人とその有る實定に遠くは
 古人二三十年是の程怪そと悦踊舞々



忘る者教月向後日用と廻顧とる不初辨の
 二境全く調和せに去終乃支迄総り脱洒
 あらに自り謂らく極く精彩と着るを重て
 一回捨命し去ん中致して牙冥と咬定し
 雙眼晴と瞳冥し寢食とも不癢せんとも
 既にして未と期月不直とさる不心火逆上し
 肺金焦枯し七雙脚氷若の底不浸とらぬ
 く支耳溪怒の房不仍くがぬし肝膽不

怯弱し七舉措恐怖多く心神困倦し寐
 寤種との境界不見は支腋不汗不生し
 支眼常に涙と帯ふ世不において通く明解し
 投し廣く名醫を探ると云はとも百葉寸
 切かし或人曰く城の白河乃山裏に巖居
 せり者あり在人は是を名をて白歯先生と
 云ふ靈壽之に甲子を圍し一人居之に里
 程と彌洗人と見は支不好はゆと行く別は

友公問詰

必^{かなら}と^{そあり}まて^さ避^さく人^{ひと}を賢^{けん}愚^ぐを辨^{べん}と^{らる}る^{なり}なり
 聖^{せい}人^{じん}専^{せん}く^し稱^{しょう}して^し仙^{せん}人^{じん}と^らは^はく^く故^この^{せい}丈^{じやう}と^ら氏^し
 の^し師^し範^{はん}よ^うして^し精^{せい}く^く大^{だい}文^{ぶん}に^つ通^{つう}じ^深く^い醫^い道^{どう}
 不^ふ達^{たつ}と^ら人^{ひと}あり^わ終^{まつ}て^し洛^{らく}耶^やと^ら別^{べつ}の^た稀^{まれ}
 且^{また}に^び微^び言^{げん}と^は吐^こく^し返^{へん}ひ^て是^{こゝ}を^{かん}考^{かう}け^よ大^{だい}に^ひに
 人^{ひと}不^ふ利^りある^{こと}と^けし^おお^わく^く塞^{さい}永^{えい}第^{だい}七^{しち} 庚^{かう} 寅^{いん}
 孟^{もう}正^{せい}中^{ちゆう}院^{いん}竊^{せつ}く^小行^{かう}徑^{けい}の^つ着^{ちやく}け^濃東^{とう}の^さ發^{はつ}
 思^し公^{こう}分^{ぶん}然^{ぜん}一^{いつ}直^{ちく}ち^ふ白^{はく}川^{せん}の^や邑^いに^て到^{いた}り^包と^ら茶^{ちや}

店^{てん}不^ふお^お初^{はつ}して^し幽^{ゆう}く^巖栖^せの^まよ^とる^ぬ里^り人^{じん}遙^{てう}り
 に^し一^{いつ}枝^しの^{たん}溪^き水^{すい}の^さ指^{さし}と^ら仰^{おほ}ち^彼の^あを^夢に^はて
 遙^{てう}りに^し山^{さん}溪^きふ^入は^正よ^は行^くち^夏夏^げを^くる^ふふ^乍
 ち^流流^{りゅう}の^み公^{こう}臨^{りん}断^{たん}と^ら樵^{しょう}徑^{けい}も^はら^か一^{いつ}時^じ一^{いつ}
 せ^まま^わり^遙く^ふ雲^{うん}煙^{えん}の^りの^公指^{さし}と^ら黄^{わう}白^{はく}の^し
 て^方方^す餘^よる^所者^あの^山氣^きに^はて^或六^{ろく}の^色
 或^{ある}は^隠る^是山^{さん}洞^{どう}の^不壑^{こく}下^げと^らる^ふの^藎簾^{れん}
 さ^りと^不昂^{おう}ち^裳裳^を裏^くけて^上は^嶮巖^{がん}の^臨

み蒙茸を披け氷雪草鞋を咬と雲霧納
 衣を履と辛汗を滴し苦膏を流して漸く
 彼の葛の屋のまに到きは風致清絶美にお
 後に丁とくろくろのを噴入心魂震し心と肌
 膚戦栗に且く巖根に倚て数息する
 者殺百少舌あめて衣を披ひ襟を正しく
 畏れく鞠躬して簾子の中からあは朦朧
 とくして齒の目と収めて端中よりかかふる蒼髪

垂て膝に到り朱顔罷かして素のぬし大布
 乃袍を掛け鞆草の席に坐せると窟中纒々に
 方入の笏よりして全く資生れ具を一机上
 只中庸と老子と金剛般若とを置くと予
 則ち禮と盡して苦ろふ病因を告げ且の救
 ひを請ふ少舌函眼を穿ひて熟く視て徐く
 とくして告げて曰く如く是山中坐死の疎人
 檀栗を拾く食ひ糜糜に付はく睡はけ

外更に何なり知らんや自ら愧に遠く上人の
 来中らふぞうの勞ろうとるまを予よ亦またち轉ころて咨し叩くわして
 休やすまひぬ時とき小せう齒し枯こゆとして予よがももな扱とくへて猶なほ
 一ひとく五ご内ないを窺うかがひ九く侯こうと察しやくと仇せう甲けつ長ちやうととす
 寸すん疹しん平へいとして頼たのむと擯あつめて洗せんおて云いく已や我が觀くわん理り
 度と小せう過かと進しん修しゆ糸いとな失しして終つひ小せう世せの重ぢゆう症ぢやうな
 發はつとと美みに醫い治ちし難がたた者ものへ公こうの禪ぜん病びやうなり
 若もく鍼しん灸しゆ藥やくの二にツ乃のおな持もちんで而しかして後のち

に是これを救すくえんと歎あはせしは扁へん倉そう力を注つぐ華くわ陀た
 頼たのむと擯あつむるも喜こ功こうを自みづかしむ能あたへども今いま既すて
 小せう親しん理りのる小せう破ぱらば勤きんめて内ない親しんの功こうを積つま
 どんば終つひに起たは復また能あたへども是これはの起た倒たふは必かな
 らば地に依よるの謂いふなり予よが回まわり頼たのむくは内
 親しんの要よう秘ひを授たまはるん學まなびびごとく小せう足そくを修しゆせん
 函はふ未みく必かなとして容ゆるみあはるるは從したが容ゆるむとして
 若もて回まわり呼よべこの必かなは回まわるるを好このむ乃すなは士

たり疾が昔一岡けるをよせて微しく公り
 告んは是養生の秘訣ふして人の知る事稀
 せりあり疾くども必は奇功を見久視も又
 期しはべし丈夫道分多くて委儀あり陰陽
 交和して人物生れ先夫の元氣中間小黙運
 して五臟列て経脈行りる衛氣管血互に昇
 降循環せり者晝夜に六九五十度肺金に北
 流ふして膈上に浮ひ肝木に牡藏ふして膈

下に沈ぼむ心火の大陽ふして上部に位ひ
 腎水の大陰にして下部を占む入勝ふ七神あり
 脾腎各々二神を藏くと呼心肺より出て
 吸腎肝に入ると呼小脈の行りて復二寸一吸に
 脈乃行く復二寸晝夜に一萬二千入百の氣
 息あり脈一身を巡行せりるの五十次火の輕
 浮に志ては絲小騰昇を好む水は沈重ふして
 常ふ下流は務む若人察せし観照或は節

と失くし志念或は度にふる別は心火熾衛し
 て胛金焦薄と金母苦くしむ別は水子衰減
 と母子互に疲傷し七五位困倦し六属凌棄
 以四大増損して各く百一乃病が生じ百薬
 功を立とるも支能いごと衆醫総にも公東く祿
 て終小若るもよさらたに到る蓋し生公若るも
 困んちるが如し明君聖まの光不念公下り
 ふし暗君庸まの光に公上小怒に以上り

恣小とる別は九卿權に誇り百僚窮を恃んで
 て民の窮困を顧るも支多し抑小某色多く
 困穢草多し賢良潛み竄し臣民瞋り恨む
 諸侯離れ叛と衆夷離ひ起つて後小民度と
 塗炭に一國脈永く断絶とる不到は公
 下に事くふとる別は九卿信んちるも百僚物と
 勤めて者不民別の勞疲と忘るるも多し衆
 に餘ゆんの粟わり婦不餘ゆんの布背く群

賢者より属し諸侯を服して民肥一國強く
 今に遠き所の蒸民をく境ひを侵すの敵國
 か一國を争ふの智を争く或はく民を戦乃
 名を知らずば人身も病む終る至人の常なり
 を氣かして下に充てしむ心氣下に充はる
 則ち七凶内小初く或はく口邪論と外より
 窺ふる終へども管衛充ち心神健うりには
 終小薬餌の耳磁を知らば身終に鍼灸の

痛痒を交けど庸流は常にを争わして上に
 怒小と上ふ怒にとり則ちたすの火右すの金を
 尅して五官縮まり病と六親苦るしみ根む
 是故に濛園曰く真人の息は是を息とするに
 雖も以てし衆人の息は是を息とする小喉を
 以てし許後が云く蓋し余下焦に在る則ち
 其息遠く氣上焦に在る則ち其息促はる
 上陽子が曰く人に真一の氣有るを丹田乃中

に降下する則ち一陽は復と若人始陽初復
 の候は知むと秋せば暖氣は以て是が信と
 なる一六九は生気なるの乃上部は常り
 清涼するん復を要し下部は常り
 らん復を要せよ又經脈の十二は支の十二に
 配し月の十二に應下時の十二に合と六爻變
 化再周して一歳を全ふとるが如し五陰上
 居一陽下を占む是を地雷復と云ふ

冬至の候より真人の息は是は息とする小陰
 といてその謂る二陽下に位ひし二陰上小居は
 是を地天泰と云ふ蓋正の候より萬物發生
 の氣は合んで百卉表化の澤と云く至人元
 氣を以て下小充と云むるの象人是を得は
 別は營衛充爽し氣力常壯なり五陰下よ
 居一陽上に止はる是は地剝といし九月
 の候より大是は得る則ち林苑を失し百

弁荒落と足衆人の息は是を息とる小嘘を
 以てとるの象人足は得る則に形容枯朽し
 齒牙揺う落に所以不延壽書に云く六陽
 共に盡く則是全陰の人死し易とす須らく
 知るべし元氣を以て常に下不充しむ是生
 命の要なり樞要とるるを昔に吳契初石室
 先生小見ゆ齋戒して鍊丹の術を授け先
 生の云く永く元氣真丹の神秘あり上との

器にあらずるよりん得く修めりて古く人
 黄朱子足は以て黄帝に傳へ帝は七齋戒して
 是を以て大道の外不充しむ丹を以て
 小大道なり蓋し五無漏の法あり修むるの六欲を
 去る五官各々其職を忘る則に混然とる本源
 の真氣彷彿として目前に充つ是彼乃大白
 道人の謂ゆは我が大なる以て是は下の大不令
 ざる者なり孟軻氏の謂ゆは浩然の氣是を

ひそいて脉輪氣海丹田の回小藏めて歲月公
布秘て是公を守一少一去一是公を去く多
適ふ一去て一朝乍ち丹竈と揆斲する別は
内外中る八紘四維總是一枚の大還丹は時不
當く初て自己了ち是天地に生つて生せに
考ふにほむとく死せざる底の真箇長生久
視の大神伝するものと覺得せん是を真正丹
竈功なる底の時節とて此豈に風ふ御一霞

小踏ぐるも地は縮め水と縮む等の鎖束なる幻夏
公にて懐くもその者なるんや大澤公攪ひく酥
酪と一厚土公変じて黄金とて茶賢曰く丹
は丹田あり液は肺液あり脉液とてく丹田あり
還一は是故に金液還丹といふ予の曰く僅ん
で命公同い法且くく禪觀公抛下し努め力
めて治する公にて期とせんなるく是の李士也が
謂ゆる清降に備する者にあつてはやん公一

夫小割では血或ひの滞碍をる復さうむむ
 函微くして笑てえく終るに李氏らとどや
 火の性火炎上より宜しく是は下よりむ
 水の水の性下より小統く宜しく是は上
 して上よりむべし水上は火下は是は名けて
 交とさへ交は則の既済と交らざる則と
 未済との交は生の象不交の死の象あり
 李家が謂ゆる清降に偏ありと丹溪は

学入者の弊を救ふんとする古人云く相火上を
 易さく身中の苦痛しむ亦多ふ補ふ火を割
 とるは以るり益し火に君相の二義あり君
 火の上に居して静をまこと相火は下小を
 して動ははらさざる君火は是一心乃まなる
 相火は宰輔とる益し相火小支股あり摺
 ゆは腎と肝とより肝は雷に比し腎は龍に
 比して是故に之を龍として海底に居せしめ

必^{かなら}と迅^{しん}發^{はつ}の雷^{らい}かあ^ん但^い一^つ雷^{らい}と一^つ澤^{たく}中^{ちゆう}に
 藏^{かく}と云^いれ^ば必^{かなら}に飛^ひ騰^{とう}の龍^{りゆう}か^ん海^{かい}の澤^{たく}の水^{みづ}よ
 あ^らじと云^いふ^は変^{へん}か^ん一^つ是^ぜ相^{さう}火^か上^{じやう}り易^{えき}と云^いふ^は割^せ
 するの終^{しゆう}にあ^らじ^や又^{また}曰^いく心^{しん}勞^{らう}然^{ぜん}と云^いふ^は則^{すなは}は
 虚^{こゝろ}して心^{しん}熱^{ねつ}に心^{しん}虚^{こゝろ}と云^いふ^は則^{すなは}は是^ぜを補^おと云^いふ^は小
 心^{しん}心^{しん}下^げ志^して以^もて腎^{じん}に交^{かう}ゆ是^ぜを補^おと云^いふ^は既^{すで}
 海^{かい}の道^{みち}あり公^{こう}先^{せん}小^{せう}心^{しん}火^か遂^{すい}上^{じやう}して世^ぜ重^{じゆう}病^{びやう}の
 發^{はつ}に若^{ごと}く心^{しん}心^{しん}降^{かう}下^げせ^ばと云^いふ^は一^つの^{こゝろ}に^{こゝろ}二^に界^{かい}乃^{すなは}

秘^ひ密^{みつ}公^{こう}行^{かう}一^{いつ}盡^{じん}一^{いつ}と^らり^て死^しの^ま末^{まつ}に^も且^{かつ}の^{こゝろ}又^{また}
 赤^{せき}ら^ん取^りと^ら模^も道^{だう}家^か者^{しや}流^{りゆう}に^おか^かる^{こゝろ}に^おか^かり^て大^{だい}い^ふ
 釋^{しやく}に^おか^かる^{こゝろ}者^{しや}と^らる^{こゝろ}是^ぜ禪^{ぜん}か^ん了^{りやう}他^た日^{じつ}亦^{また}發^{はつ}せ
 ら^る大^{だい}い^ふ小^{せう}哭^く法^{ぽう}の^{こゝろ}変^{へん}者^{しや}と^らる^{こゝろ}は^な親^{しん}の^{こゝろ}無^む親^{しん}の^{こゝろ}
 以^もて正^{せい}親^{しん}と^らる^{こゝろ}多^た親^{しん}乃^{すなは}は邪^{じや}親^{しん}と^らる^{こゝろ}向^{かう}と^らる^{こゝろ}
 公^{こう}多^た親^{しん}と^らる^{こゝろ}世^ぜ重^{じゆう}症^{じやう}の^{こゝろ}見^{けん}法^{ぽう}今^{いま}是^ぜを^お救^{きゆう}ふ^{こゝろ}
 公^{こう}親^{しん}と^らる^{こゝろ}以^もては^な可^から^ずと^らる^{こゝろ}公^{こう}若^{ごと}く心^{しん}炎^{えん}
 意^い火^かと^らる^{こゝろ}収^{しゆ}めて^は丹^{たん}田^{でん}及^{かつ}ひ^は足^{そく}の^{こゝろ}乃^{すなは}は^な胸^{きゆう}

瞞自然に清涼にして一^ツ點の計較の想なく一
 滴の識浪情波なくん是^{しんごん}真觀清淨觀なるを
 之入^{やまひ}度^となり^と志^しを^とく^く禪觀^{ぜん}を^た下^げせん^と
 佛の言^いへ^くん^んん^ん足^んん^んお^さめ^て能^く百^一乃
 病^{やまひ}を^と治^とと^と阿^あ含^んに^そ酥^そを^ち用^はは^の法^{あり}を^の
 勞^{ろう}疲^ひを^ち救^す入^を度^をを^ち妙^をなり^天台^の摩^ま訶^か止^し觀^を
 に^い病^を因^をを^ち編^をむ^るを^ち度^を甚^をと^と盡^をす^る法^を法^をを^ち説^を
 度^も亦^も甚^とと^と精^を密^をあり^{十二}種^の息^{あり}を^とよく

元病^をを^ち治^をに^し脚^を轉^をを^ち縁^{して}て^度を^ち見^る乃^法
 あり^をを^ち大^を定^を心^を火^をを^ち降^を下^を志^をを^ち丹^を田^を及^をび^を足^をを^ち
 収^をむ^をを^ち以^て至^を要^をと^に但^を病^をを^ち治^をする^のを^ちあ^る
 じ^を大^を心^をに^し禪^を觀^をを^ち助^をと^く盡^を一^を繫^を縁^を結^を其^の
 二^を止^をあり^をを^ち禪^を美^をの^實實^を相^をの^因因^を觀^を繫^を縁^をは^を知^をを^ち
 脚^を轉^をを^ち海^を丹^を田^をの^をる^に収^をめ^守る^をを^ち以^て第一^を
 と^に修^を者^を是^をを^ち用^をる^に大^を心^をを^ち利^をあり^古し^し
 永^を平^をの^因因^を祖^を師^を大^を宋^をに^入て^を必^を清^をを^ち大^を童^をり

おに師一日密室に入て益々精々後曰く元
 子坐禪の時さんが友の堂の上にてかくるゝと
 是即ち顛師の謂ゆは繫縁止の大畧あり
 顛師初め世の繫縁内親の秘訣と教へくそ
 家兄鎮懐が重病と萬死の中に助け救ひと
 庵の復へ精々くは小止觀の中に説けるまこと
 白雲和尚曰くあつ禪に心をて臆子の中に
 充々む徒公匡一衆公領一宿公接一

横に應じ及び小冬普脱七縦八横のるふおいく
 是公用ひて清くするまふ一老本殊に利益多と
 復公譬をて定にせむを一是蓋一素同
 みゆは恬澹虚無とまは真氣是に志とく入
 精神内に守るゝ病何と下りあつむといふ終
 に本つたの者あつむ且つ其内に守るの
 要元氣とて一身の中に充塞せし充々二百
 六十の骨節八萬四千の毛竅一毫髪をりりも

欠^く缺^{けつ}のまふくくしめん^{めん}まふ^{まふ}要^{よう}にこれけふ^{けふ}
 者^{もの}の至^し要^{よう}なるる^るの^の知^ちる^る一^一彭祖^{ほうそ}白^{はく}く和神^{わしん}
 導^{どう}氣^きの法^{ほふ}當^{たう}さふ深^{ふか}く密室^{みつしつ}に鎖^さぎ^ぎし^し牀^{しやう}に
 案^{あん}ト^ト席^{せき}に煖^{わん}め^め枕^{まくら}の^のる^ること^{こと}二十^{じふ}す^す正身^{せいしん}偃卧^{えんご}
 一^一瞑目^{めいもく}して心^{しん}氣^きに胸膈^{けうかく}の中^{のちゆう}に閉^しぎ^ぎ鴻毛^{こうもう}に
 以^{もつ}て鼻^び上^{じやう}につ^つあ^あく^く動^{どう}る^るる^るの^の二百^{にひゃく}息^{いき}に^に行^ゆく
 耳^{みみ}閉^しま^まふ^ふく^く目^め見^みる^るま^まふ^ふく^く形^{かたち}の^のぬ^ぬく^くさ^さは^は
 則^{すなは}ち寒^{さむ}暑^{あつ}も^も侵^{おそ}る^ること^{こと}ま^ま能^{あた}へ^へに^に蜂^{はち}萬^{まん}も^も毒^{どく}する

半^{はん}能^{あた}へ^へに^に壽^{じゆう}た^た二百^{にひゃく}六十^{じゅうじゅう}歳^{さい}足^あ真^ま人^{にん}に^にを^をら^らし^しと
 又^{また}嶺^{りやう}山^{さん}翰^{くわん}が^が白^{はく}く^く已^{すで}に^に飢^うへ^へて^て方^{かた}に^に食^{しょく}一^{いつ}未^まど^ど飽^あは^は
 して先^{まづ}止^とむ^む散^{さん}步^ぽ逍^{せう}遙^{やう}して^{して}務^{つと}め^めて^て腹^{はら}を^をして^{して}空^{くわ}
 かくし^し腹^{はら}の^の空^{くわ}る^る時^{とき}に^に當^あて^て仰^{おほ}ち^ち静^{じやう}室^{しつ}に^に入^い
 り^り端^{たん}坐^ざ然^{ぜん}然^{ぜん}して^{して}出^で入^にの^の息^{いき}に^に數^{かず}へ^へよ^よ一^{いつ}息^{いき}より
 か^かそ^そへ^へて^て十^{じゅう}ふ^ふ到^{たう}り^り十^{じゅう}より^{より}數^{かず}へ^へて^て百^{ひゃく}に^に至^{いた}り^り百^{ひゃく}
 數^{かず}へ^へぬ^ぬら^ら去^きて^てふ^ふに^に至^{いた}り^りて^て世^よ身^{しん}兀^{ぶつ}然^{ぜん}として^{して}
 世^よ心^{しん}寂^{じやく}然^{ぜん}する^るま^ま虚^こ空^{くう}と^と寫^いし^し形^{かたち}乃^{すなは}ち^ちや^やく

夜舟問言

五

ありさうくふくして一息おのほくく止まり出でに
入らざる時此息八萬四千の毛孔の中より雲
蒸し霧起けりゆく云始初来れ諸病自ら
除れ諸障自然に除滅とらるるのを悟せん
譬へ盲人の忽ち目を開きて眼を穿くが如き
世時人に乃ち縁て器頭を掃くと度か利ひに只
おとらるるを所か省思して爾ら乃ち元氣を
長養せんまは是故にまは目力か養ふ者

は常に瞑し耳根か養ふ者か乃に飽さるる
か養ふ者か不黙とすと予ら白く酥か用るの
法は七つひひに一や齒か白く行者定中四大
調和せむ身心ともにも勞疲とらるるを覺せん
かか起して應さふ世想かかかかか一譬へは
色香清淨の糠糲鴨卵の太ひさの如くある
者頂上に頭をせんに其氣味微妙ふくく
遍く頭顱のらるかやと一後くくく洞

下—来くあ肩及び雙臂及乳胸膈乃る
 肺肝腸胃脊梁臟骨次第に沾湿し將ら
 去る仕時に當て胸中のみ積六聚疝癖塊痛
 ん小隨て降下とる半氷の下に漬くごとく
 歴くくして聲あり遍身が周流し雙脚を
 温湿し足心に至るく仰ち止む行者再び應
 ず小此親か本とて一彼の浸くくして咽下
 とる亦の餘流積りて湛して暖め蒸ひ来

怡も在の良醫の種く妙香の菜物を集め是
 か華湯して浴盤の中盛り湛して我が臍
 輪已下が漬け蒸ひがゆし此親かさるは
 唯心所現の故に鼻根乍ら希有の香氣か
 づさ身根俄く小妙好の軟觸かましく身心調
 適さるるの二十歳の時み遠くに勝より此
 時小當く積聚が消融し腸胃が調和し覺
 へば肌膚光澤か生じ若くは勤めく怠くごん

何れほどの病を治せざらんむ何れほどの速くはぬらん
 何れほどのゆる成せざらん何れほどの道を通せざらん
 結の速速と行人の遅慢乃精進に依はらる
 のと走馬の甲斐の時多病にして公の患ひに
 十倍した衆醫總に顧みざらん百端か
 窮じしとくも救ふるたの術か一法におく
 上下の神祇に祈て天仏の冥助か慈ひ預ふ
 公の喜ひそわ射るに世の糠酥乃妙術か

傳受とる夏公歡喜に堪へに綿くくく精
 修と未と期月さるるに衆病大末消除に
 爾來身心輕安とる夏公覺ゆるのこ癡く元
 一月の大小公紀せぬ年の潤餘を多しを念
 以兼に輕微にして人秋の膏おるものしを
 くらがぬし馬年今歳何十果あるものもはこ
 知るに中の端中多し若舟のし中に瀆道と
 何者大九二十歳在人都て知る未か一も中

乃か顧るに此も黄梁半熟の一夢れぬ今
 此山中女人のやまに向く此枯木の一具骨を放
 て太布の單衣纏りに二三片を掛け歳冬のそ
 威綿を折くの夜といふとも枯腸と凍損とる
 といふは此粒とを断へて穀氣を受けざ
 り未動もささる數月に及ぶといふとも終り
 凍餓の覺つてもあたまは此親の力らあふや
 亦今既に公小告るに一生用ひ盡さず底の

秘訣を以ては此外更に何なるやとて自ら
 収めて我々の手にも亦も漏らさぬんで禮辭に
 従くして洞戸の下に木末纏りに張陽と
 掛く時小履を下の丁とて山谷小茶を付
 わり且つ驚き且つ怪んで畏れく回顧すも
 遙かに齒が巖窟を蹴さす自り送り来る
 見ると舟ち回く人迹不到の山路西東分ち難
 一忍く帰客を悩せんを未志とて飯糧

公導^{こちひら}んと去て大駒^{おほこま}展^{ひら}か着^きあ瘦^{せう}鳩^{こう}杖^{じやう}をひこ
 嶮^{あぶら}巖^{いわ}公^{こう}騎^りと崎^{さき}祖^そ公^{こう}階^かる^る身^み飄^{ひう}くとして祖^そ途^と
 と行くが如^{ごと}く終^{はつ}笑^{せう}して先^{せん}驅^くは山路^{さんじゆ}遙^{はる}かり
 里^{さと}許^{もと}公^{こう}下^{くだ}て彼^{かの}溪^{せき}水^{みづ}の亦^{また}到^{いた}て舟^{ふね}ち白^{しろ}く此^{この}の流^{なが}水^{みづ}
 に海^{うみ}ひりくは必^{かならず}に白^{しろ}川^{がは}の邑^{むら}に到^{いた}らむと去^さて
 快^{たげ}然^{ぜん}として別^{わか}け且^{かつ}く柴^{しば}支^さして幽^{ゆう}ら回^{まわ}歩^{あひ}
 と目^め送^{おく}とるたす老^{らう}歩^ふの勇^{ゆう}壯^{さう}なる身^み飄^{ひう}然^{ぜん}
 として存^{ぞん}公^{こう}道^{だう}且^{かつ}く羽^う化^けして登^{のぼ}仙^{せん}と人^{ひと}

の如^{ごと}く且^{かつ}つ羨^{せん}み且^{かつ}教^{きやう}は自^{みづか}恨^みむ存^{ぞん}公^{こう}終^{はつ}る身^みを
 此^{この}等^{らう}の人^{ひと}に随^{したが}逐^{じゆく}とる変^{かは}結^{むす}はざる業^{わざ}公^{こう}除^{のぞ}くと
 して帰^{かへ}る来^きて時^{とき}くに彼^{かの}の内^{うち}親^{おや}公^{こう}瀝^{せき}修^{しゆ}とる
 に纒^ま糸^{いと}公^{こう}之^の年^{とし}に老^{らう}とざる小^{せう}徒^た若^{わく}の衆^{しゆ}病^{びやう}業^{わざ}餌^え
 と用^{もち}ひに鍼^{しん}灸^{しゆ}公^{こう}假^{かり}くに任^{まか}運^んに除^{のぞ}遣^{はな}は特^{とく}を
 病^{びやう}を治^なとるの事^{こと}小^{せう}わくに從^{したが}若^{わく}手^て御^ご公^{こう}接^{せつ}む
 夏^{なつ}はと齒^は牙^が公^{こう}下^{くだ}と来^きはざる底^{そこ}乃^{すなは}難^{なん}信^{しん}
 難^{なん}透^と難^{なん}解^げ難^{なん}入^い底^{そこ}の一^{ひと}着^き子^こ根^ねに透^とる底^{そこ}

に徹して透りさして大執喜かゆる者大九
 六七回を餘の小悟悦踊舞かちる者數か
 ちるに妙喜の謂ゆる大悟十八夜小悟數か
 知るはと初て知る寔に亦か欺るさるるのや古
 一二三回の襟を着くとつとも足を常に
 氷雪の底に浸はが如くさける者今既にこども
 巖をの目とまゝとも襪せに纏せに馬齒既小
 古稀か越へるとつとも括はるるはも點の小

病も病とさるた度ハ彼の神術の餘勳あゝん
 之も度ふるとも喆林は死の殊喘多ふも無義
 荒唐の妄終と紀取してはて作の上流を誰惑
 とと足宿るとに靈骨有て一樞に既に感とる
 底の俊流のぬりふ設くるにあゝに癡純予の
 ぬく骨病予に類いとする底看續して子細小
 觀察せむ必は少くは補ひるゝんく只忍る別
 人のよか拍して大笑せん未を何れ故を馬枯

其父咬んで午枕に喧びと



明治十九年十二月三日 翻刻御届
同 年同月廿二日 刻成發兌

發行所

貝葉書院

京都市上京區木屋町二條

京都府平民

出版人

菱澤重兵衛

下京區第十四組四條通御旅町
三十七番戶

